東京外国語大学若手研究者インターナショナル・トレーニング・
プログラム（非英語圏ヨーロッパ諸国）（TUFS-ITP-EUROPA）派遣報告書

氏名

石田聖子（東京外国語大学大学院　地域文化研究科　博士後期課程）

派遣先機関

ボローニャ大学（イタリア）

受入教員

ジャコモ・マンゾリ教授

派遣期間

2009 年 9 月 1 日～2010 年 8 月 7 日

研究テーマ

20 世紀イタリア文化表象における笑いに関する考察

研究の概要

20 世紀は笑いが新たな意義を獲得して浮上してきた世紀である。本研究は、そうした笑いの 20 世紀的特質を指摘するとともに、それら特質が、映画、及び、文学領域においていかなる表象を生みだしてきたかを考察することを目的とする。主な考察の対象となるのは、20 世紀イタリアで活躍した三人の作家、アルド・パラッツェスキ（Aldo Palazzeschi, 1885-1974 年）、アキッレ・カンパニーレ（Achille Campanile, 1900?-1977 年）、チェーザレ・ザヴァッティーニ（Cesare Zavattini, 1902-1989 年）、及び、1910 年代までにイタリアにおいて製作された喜劇映画である。

論文の第一章ではまず、笑い理論の変遷を古代より通時的に追うことで、20 世紀的笑い考察のための予備的分析を試みる。現象としての笑いの発現形態に関しては現在までに注目すべき変化は報告されていない一方で、その社会的意義、概念、それをめぐる理論といった側面においては時代による変化が認められる。笑いを理論化する試みは古代より継続して行われてきたが、当初、関心は専ら「何が笑わせるのか」といった笑いを喚起する対象の性質をめぐるものであった。しかし、20 世紀に至り、笑いは専ら主体の認識の在り方やレベルを反映するものとして捉えられるようになり、理論の面でも、それまでに提出された理論を包括する新たな理論が求められるようになった。

つづく第二章では、きわめて 20 世紀的な芸術形態である映画と笑いとの近親性を明るみに出す一方で、その初期喜劇映画にて実現された身体表現と認識的トリックに関わる表象に着目しながら、それらの意義を分析することで、つづく章へ向けての基礎的考察とする。

第三章では、パラッツェスキの初期詩作品（1905-1909 年）、未来派宣言「反苦悩」（1914 年）、未来派小説『ペレラの法典』（1911 年）を考察の対象とする。パラッツェスキは笑いに、アリストテレス以前の笑いが担っていた破壊し創造する力を見出し、そのダイナミズムを応用することで、20 世紀初頭の文化風潮にひとつの突破口を開こうと試みたと考えられる。

第四章では、カンパニーレの初期小説作品（1927-1933 年）を対象とし、笑いの論理をめぐり考察する。カンパニーレの小説は、無秩序をもたらすと捉えられがちな笑いが、逆説という特有の論理を有する事実を示す。パラッツェスキが笑いに神的な効用を求めた一方で、カンパニーレは、あくまでも笑いを人間的見地から捉えるという意味で二人の作家により示された笑いは好対照を示す。

最終章となる第五章においては、ザヴァッティーニの初期小説三作品『わたしについて大いに語ろう』（1931 年）、『貧乏人は狂っている』（1937 年）、『わたしは悪魔だ』（1941 年）、及び、ザヴァッティーニが脚本を担当した映画作品『ミラノの奇蹟』（1951 年）を対象とし、笑いの数ある側面のなかでも 20 世紀に特に注目されたユーモアという在り方について考察する。ユーモアとは笑いのひとつの形態である以前にひとつの認識態度を示す語であり、それを以てしては、人間でありながら人間を超えうる可能性が示唆される。ユーモアを別の認識レベルへと跳躍を果たす契機として捉えるザヴァッティーニのユーモア観は、その多彩な活動の原動力となるとともに、他に分類され難い表象の数々を育むこととなった。パラッツェスキときわめて似た表象に多く拠り、また、カンパニーレとは同時期に人気を博した「ユーモア作家」であったことから明白なライバル関係にあったザヴァッティーニによる笑い認識は、パラッツェスキとカンパニーレの笑い認識に反発すると同時に統合する様相をもみせる。パラッツェスキが笑いの「神的な」側面を擁護し、カンパニーレがその「人間的な」側面に注目したとすれば、ザヴァッティーニの眼差したのは超人間的な、あるいは、ボードレールの用語を用いるならば「悪魔的な」笑いであったと考えられる。

具体的成果

今派遣を契機として、ボローニャ大学との共同学位授与制度に則る活動を開始したことがこの度の派遣における第一の成果として挙げられる。活動の具体的内容としては、派遣先大学にて現地研究者と意見交換を行い、指導教員による定期的な指導を受けながら、イタリア語による博士論文の作成を行った。指導教員との面会は、派遣後の博士論文構想段階では一～二週間に一度程度、執筆を開始してからは、執筆したものがある程度の分量に達した時点（月一～二回）でアポイントメントを入れ、実施した。また、週一度程度行わ

れるボローニャ大学博士後期課程のゼミに参加することでは、博士課程に在籍する学生との交流、及び、知見の拡大を図った。

論文執筆に先立ち、あるいは、執筆に並行してはまた、ボローニャ大学附属図書館、市内図書館、視聴覚資料アーカイブにおいての文献・資料収集を行った。「学問の町」との異名をとるボローニャにおいて入手可能な資料は事前に想像していた以上に数多く、移動の手間を要することなく、資料収集を実施することができた。とりわけ、通常、視聴に煩瑣な手続きを介することの多い視聴覚資料に関しては、所蔵資料数において豊富なばかりでなく、視聴に係る手続きについても簡便であったことは大変な幸運であった。

また、本事業の一環として発表したものとしては、『笑いと創造（第六集）』（ハワード・ヒベット、文学と笑い研究会編、勉誠出版より 2010 年秋発刊予定）に寄稿した論文「笑う〈わたし〉――チェーザレ・ザヴァッティーニの初期文学作品における〈わたし〉」が挙げられる。同作家をめぐっては以前にも論文を作成したことがあるが、今回、派遣先において執筆にあたったことで、未見であった資料を活用することができ、また、日本語での執筆ではあったものの、論旨について派遣先指導教員と議論をする機会を得たことは、当論文に有意義に作用したと考えている。

<u>今後の課題・問題点</u>

今後もこの度の派遣を契機に開始した共同学位授与制度に引き続き則り活動を行うことから、今後の課題のうちの最たるものとしては、博士論文の継続的作成が挙げられる。

その他の問題点としては、特に、①学術レベルで通用する言語能力の習得、②イタリアにて通用する論理的思考能力、及び、③口頭表現能力の養成が挙げられる。第一の点に関しては、今回の派遣期間中の論文作成を含む学術活動を通じて研鑽に努めてきたものの、いまだ充分なレベルに達しているとは考えられず、実際に、論文執筆時には単数あるいは複数のネイティブスピーカーによる丹念なチェックを要するのが実情である。そうするなかでは自己表現に制限を感じることも多く、今後の論文作成のためにも速やかな改善が求められる。第二の点に関しては、とりわけ、現地研究者との議論を行うなかで早急な改善が実感される点であり、先に指摘した言語能力の向上と並行しての鍛錬が必要な能力であると考えている。第三の点については、この度の派遣期間中に、事前に想像していた以上に切実に求められた能力であり、最も根本的な改善が望まれる点でもある。イタリアでは伝統的に口頭表現能力を重視する傾向があるが、実際に、今回派遣期間中にも、執筆したものはもとより、口頭における表現が求められる機会が数多くあり、その際に、満足のいく対応ができたとは到底考えらない。

いずれも、現地にての学術活動実施期間中に集中して鍛錬することが有益であると考えられる能力であることから、2010 年 9 月 1 日の開始を予定している次回の派遣時には、今回派遣時の反省を踏まえ、くれぐれも注意してそれらの改善に取り組むつもりである。